

ちやかぶき
茶歌舞伎

11日、川根茶五香庵において、静岡市の小学生闘茶キング11人と、地元の子どもたち「川根本町茶童子」12人との茶歌舞伎（闘茶）交流会が行われました。

参加者23人のうち、全問正解者は2人（いずれも川根本町の子）でした。お見事！

茶歌舞伎とは、茶香服とも書きますが、別名「闘茶」とも言います。いずれも一般的には聞き慣れない言葉かも知れませんが、平素、酒に馴染みの少ない人でも、聞き酒（利き酒）という言葉は耳にしたことがあるでしょう。口に含んで酒の善し悪しを鑑定することだと察知されることと思います。茶歌舞伎もこの聞き酒同様、茶の特質を判別しあう競技のことです。

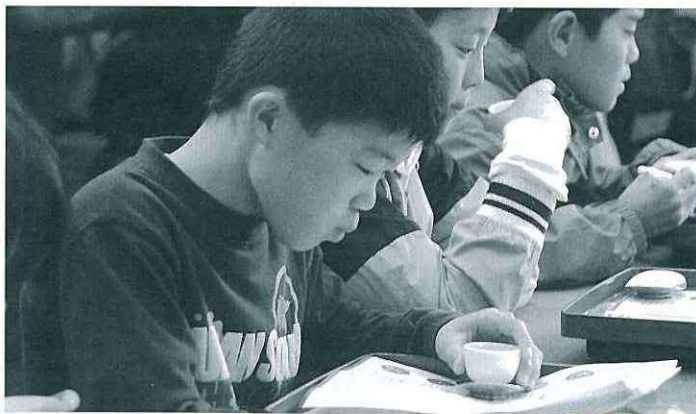
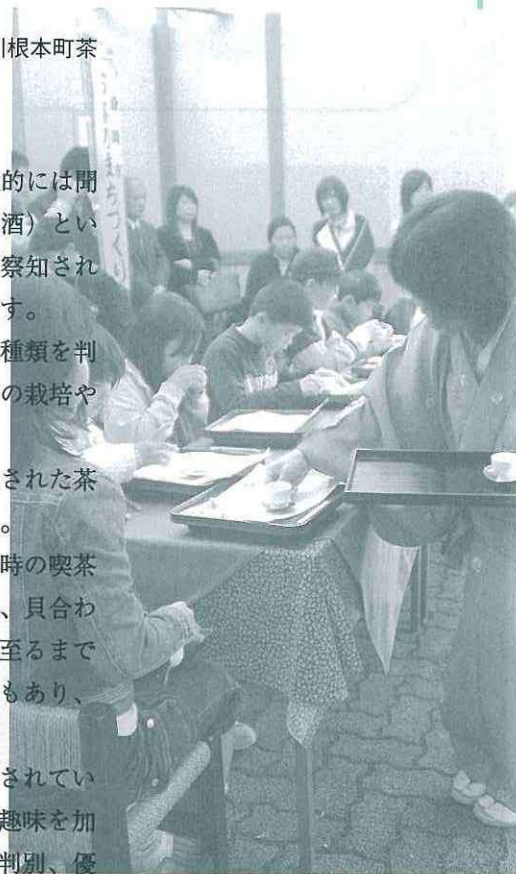
中国の宗時代には、一座に集まった人々が抹茶の産地や茶を点てるのに使った水の種類を判別しあって勝負を決める「闘茶」を行っており、この闘茶が中世の初期、わが国に茶の栽培や製造法が渡来すると共に伝わってきたものです。

最初は、^{さいざいぜんじ}柴西禅師から^{みょうましようじん}明恵上人に伝承された茶を、^{とがのお}京都の梅尾に植え、そこで摘採された茶を本茶、その他の茶を非茶と言い、これらの飲み分けが「闘茶」として普及しました。

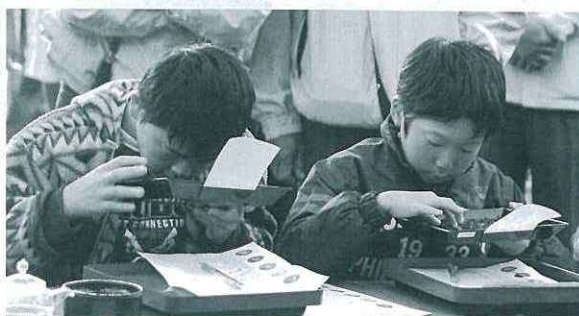
全盛期は南北朝時代から室町初期の桃山時代にかけてのこととされています。当時の喫茶は、上流の公家や武家社会の間で飲用されていた関係で、闘茶の風潮も、香合わせや、貝合わせなどと同じく大変優雅な遊びとして流行しました。しかし茶会の飾り付けや置物に至るまで豪華になるなど、時によっては賭け事にまで発展して人間関係の破綻をもたらすこともあり、ついには足利幕府は建武3年、禁令を交付するまでに至りました。

それが茶道の創設と共に茶事の余興として茶歌舞伎の形式にまとめられ現在に継承されています。今日では、茶歌舞伎は様々な分野で行われています。例えば初心者には娯楽と趣味を加え、茶を通しての交流の場として、また専門的には茶の鑑定眼を養い、製造の良否を判別、優良生産の向上に役立っています。

引用文献：日本茶インストラクター教本



見事に5種類とも利き当てました
右…中川根南部小5年 中野志保さん
左…中川根南部小5年 河野紗江香さん



茶歌舞伎に出された茶は「やぶきた・山の息吹・おくひかり・釜炒り茶・紅茶」の5種類です
それぞれの茶の見た目・香り・味によって、何の品種か判別します